曲付次第

音曲者、五音・六調子に達し、文字の声を正して、軽重・清濁を曲に選び寄するによて、此二三ヶ条、能能学得せずば、うるはしく、音曲を知れる人とは申がたし。

然ば、五音に長じたる人、万人に一人もなきがゆへに、ただ、大かたを心得て、あるひは音感を便りとし、あるひは曲得の達人を用ゐて、曲を作付し、文字を書連す。かるがゆへに、数人曲聞の感もあるによて、是を、しばらく、世上に名輩を得る人とする也。

然者、五音・六調子の達人と、音曲の上手とは、各別の物也。五音を心得たる人なれ共、音曲をば知らぬ人もあり、音曲の上手にて、五音に達せぬも有。但、誠の上手の位に至りぬれば、五音相伝なけれ共、をのづから五音に通ずる人もありと云り。ある人云、「五音・音律の道は、訓うる人も知らじ、習人も知らじ。ただ、堪能の達人より出たる得所あるべきか」と云り。礼記云、「声無くて聞き、色無くて見る」と云り。

さるほどに、をよそ、あまねく万人の感聞の褒美する所を以て、しばらく是を宛てがひて見るに、抑、音曲の曲付は、五七五、七五七五と行物也。七五七五の句を歌い出す文字頭に、同声を置べからず。同声重なれば、重聞也。仮令、去声の声にて文字を云出したらば、後句を入声の声先にて色どるべし。又、韻の字も、ことに、同声の響き続きては、重聞なるべし。さるほどに、声を変へて謡い止めんとすれば、又、曲の声にかなへる言葉の字、左右なく無し。甲乙の声似合ひたる言葉の字を集めて書連すべし。文字の正に曲のをのづから似合たるは、上上の曲なるべし。甲乙のかかり似合ひたる句移りは、なをし大かた也。一字二字の文字移り、四声・呂律の響きに、是非あることを分別すべし。細かに宛てて味わふべし。されば、少しきの変り目にて曲聞の是非する所を、人わきまへず。但、上子はこれを聞くべき也。

　文字の正にかなへるとかなばざるとに曲を宛てがふ事、よくよく心得べし。文字の音声いかにもと分がたからん所をば、五音を極めたらん人に問ひて、我音曲に宛てがひて、拈弄し合はせて、曲を定むべし。かやうに、五音・四声の文字に曲のかなへる事を分別して、曲を色どりすましぬれば、曲聞美しく、なびやかにて、かならずよき曲ありとだに聞ゑぬ程の曲聞のかかりにて、しかも面白きを、上曲と知るべし。「至て深きは浅きに近し」と云事、心得べし。

しかれば、曲を付る大事とは、ただ曲を付るとばかりは思ふべからず。文字の声かなひだる言葉を、甲乙によくよく宛てがひて、七五七五と作り続けて、さて、拍子にまかせて謡い心むる時、当座の曲聞、美しく、闌けて、をのづから面白きを、曲付る大事なりけりと安得すべし。されば、いかにもいかにも、番者・聞手を選びて、是非を定むべし。礼記云、「上子聞道、勤学、中子聞道、如損如亡、下子聞道、拍手大笑。不笑以不可有道」云り。

一、七五七五の韻の字に、同じ文字連付すべからず。同字別声あれ共、文字の響き重聞也。後句の韻の字の曲を据えて置きたらば、前句の韻の字を云捨てて置くべし。此前韻・後韻の音聞、ことに地の物・口説などに多かるべし。句移りとは、七五七五の声がかりの続く聞風也。文字移りとは、ことに韻より後句に移る堺也。ただ、七五七五の句移りに、同懸・同声・同字を付連すべからず。仮令、二句斗までは同声なりとも苦しかるまじ。三句と続けば、耳に付く重聞あるべし。よくよく、文字により、声によりて、聞風を色取べし。

　一、音曲の拍子の事。曲の命なり。「声を忘れて調子を知れ。調子を忘れて曲を知れ。曲を忘れて拍子を知れ」と云り。

　七五七五と行く内に、拍子を打つに、謡一つの内に二段ある物也。初めの段よりは、二段目をば、拍子を寄せて、軽軽と謡い止むべし。文字は、五七五の内に、文字余りとて、五文字の六あるもあり、七文字の八九あるもあり。かやうなる文字余りの句の内をば、文字を拾ひて寄すべし。拍子は程定まれり。文字は余る所を、同じ文字配りに謡へば、文字余りて、拍子に合はず。文字数に従へば、拍子延びて、歌い遅し。かやうなるをば、拍子を本にあてて、文字を寄せて、拾ふべし。若又、文字の足らぬ所もあるべし。それをば、拍子を越して、文字の足らぬ分を拍子にて持ちて、文字の足りたるごとく拍子を打て行けば、あらざる曲になりて、感も出で来ることあり。かやうに似合かなひて、曲と拍子と相応する事を、よくよく習い学得して、曲付すべき也。文字の多く余る所にて、思はざる外の曲懸出で来る物也。それらをば大に宛てがひて、拍子を越しつ、詰めつ開きつ、文字を延べつ、料簡して、曲を定むる也。記すに不及。

一、曲の位の事。前に申つるごとく、文字の正をよくよく極めて、曲聞美しく、闌けて、無曲音に聞ゆるは、事を尽くし尽くして、安き位に至る妙声也。しかれば、無曲感聞を上曲とすべし。又、曲聞心耳に通じて、よき曲哉と聞ゆるを、第二とすべし。是は、極むる堺の、有文音感の位也。

　又、よき曲なりとも、歌い一つの内に二所ともあらば、重聞と嫌ふべし。礼記云、「果不及」云り。

一、音曲の品品。先、祝言の歌。さし声より、五七五の句、六七反云流して七五一句なり。只歌一首は二句なり、下歌より甲の物まで、十句斗謡ふべし。是はことに、耳に付曲などはあるべからず。直に云流し、云納めて、漢二重甲云の声一所ありて、かかりのどやかに、文字移り軽軽と、たぶやかに曲付すべし。

凡、祝言のみに限るべからず。一句謡は、七五七五と拍子に合はせて、直に確やかにあるべし。拍子を置きて待曲、遣る曲、越して持つ曲、切る曲、重曲、責め曲、早曲、如此節・曲共、序分に歌ふ一歌いには有まじき事也。かやうなる曲の数数をば、物数に従ひて、次第連続に、奥の物に至るまで、所所に、この曲の品品を、用用に従ひて曲付すべし。それも、謡一の内に、一所ならではあるべからず。ことさら、切る曲、畳む曲など、繁かるまじきなり。七五七五の内にも、同じ声がかりあるべからず。漢の声は、甲の物一段の内に一所あるべし。乍去、所によりて、漢の声を重ねて上る所もあるべし。さやうならん所を知らん事は、作者の知分より出たる達作也。又、其句によりて、五七五にも定まらぬ所有べし。

一、曲舞。是は、世の常の音曲には変りたる曲流なり。先、拍子を体にして、拍子にかかりて、軽軽と行べし。拍子を越して、詰め開きを七五七五の句移りに心に持て拍子を打て、待曲、重曲、切りて遣る曲など、揉み寄せて曲付すべし。

但し、当世、小歌節曲舞とて、只謡のかかりにて曲舞になる事、多く聞ゆる也。これは、なびやかに、幽玄のかかり也。かやうなるは、曲舞なれ共、節曲舞の曲とは申がたし。さるほどに、曲の次第相応せね共、文字移り・句移りのかかりよくて、曲聞面白ければ、当世、この風体に従ひて曲付すべし。

又、曲舞を重点にて謡ひ止むる事あり。是又あるまじき事なれ共、近頃は、重点にて止むる事、あまた聞ゆる也。さりながら、まことの節曲舞ならば、重点にて止むる事、あるべからず。

　曲舞に拍子を体にする事、舞にて謡ふ曲風なるがゆへに、拍子を体にする也。さてこそ、惣別、音曲と云名目なるを、「舞」の字を添へて、「曲舞」とは名付られたれ。よくよく心得分て曲付すべし。

一、音曲に息の事。連声の地体也。息を助くる曲付、是、曲の道なるべし。

先、五七五、七五七五の句移りの堺にて息を次也。さし声の序分までは、大略、七五の句間にて息を次なり。歌いとなりては、其曲体によりて、二句斗も息を次がで云渡す事あるべし。　　　　　　　　　　　　　　　　　、・

　抑、音曲の句移り・文字移りを持つ物は息なり。文字を云納むると同じやうに息を次べからず。息長く、たぶやかに残る内にて云納むべし。息短く、息づかしき内にて云納むれば、文字の据わることあるべからず。納めの声の響きより後に息を次てこそ、句間にて息を次ぎたるにてはあるべけれ。能能心得べし。

　又、捨て声とて、云納め、又、句移りなどの文字を云捨てて、後句へ移る事あり。其時は、文字の内にて、わざと息を捨つる事あり。是は、次息にて文字を捨つる也。節曲舞などにある曲也。是は闌けたる曲位也。別義の秘曲と心得べし。順道の音曲には、あい構へて、息の内にて文字を云果つべし。

然ば、歌い出す声先に口伝有。声先の正しきも息なり。甲乙の位の正しきも息也。調子を持つも息なり。音曲のかかりも息なり。

凡、息を次ぐ事、句間にて次ぐ内にも、又、所によりて、息を盗みて次在所あるべし。盗むとは、息を次とも知らせぬ堺也。又云、切りて待拍子間に、文字を切りて息をば切らぬ在所あるべし。又、息をば次共、機を切らぬ在所あるべし。是らは、音曲習伝の刻、直相伝なるべし。但、音曲を得たらん達人ならば、不伝にても知るべし。

　如此、音曲の惣体を持つ地体なる程に、息を助け、息を次ぐに、便り有やうに心得分て曲付すべし。返返、息の次ぎ所なからんは、道もなき曲付・連声なるべき也。曲道者息地可知。息次、息次。

大かた、曲付条条、已上。此外、無曲妙声の懸をば、記すべき所にあらず。

秘云。ただ、音曲の至道には、和歌の言葉を取り合はせて書付すべき也。そのゆへは、先、五七五の句体の本体なり。又、詞の吟を本風にして詠み続くる詠音なれば、五音にも通じ、文声にも正しき道なる程に、歌の詠吟、音曲に合はずと云事なし。しかれば、和歌を謡ひ連ねて見るに、音風のかかりに違ふ事あるべからず。音曲は文字の正路を以て曲道のかかりとなす事、是にて知るべき也。

　又、文字をよくよく宛てて見るに、声とは少し合はぬかとも思へ共、音声の吟にかなへる所もある物也。是らは、ただ、吟を体にして用ふべし。便音とて、文声少し合はざれども、書連ねたる曲文の、吟に引かれて詠聞幽流たるをば、是を嫌ふべからず。「軽重・清濁は上による」と云り。

凡、音曲の連声は、流水の地体に従ひて行がごとし。平地の流河は、水面うららにて、去事速か也。土石段段たる流所は、曲水文をなして、さざ浪浮き、水逆巻きて、不流不去に見ゆれ共、終には、流体の順次に従ひ行なり。音曲も、直なるかかりの、七五七五の拍子のままにて、曲声正路なるは、音聞幽幽と行く也。又、句の長短、文字の不同によりて、声文曲を成て、新曲異聞のかかりなり共、音正の文字移り、五音連声の詠吟かなひたるは、曲水の地体に従ふに是同じ。若又、如此五音連声の吟道をも知らで、只曲を付、かかりを作りなせる斗の音曲の次第は、平地に波瀾を生じ、又は、雨水の庭たづみの、一短小浪曲水の流文をなせども、終には水面流断するがごとし。

　長明云、「夫、行河の流れは、絶えずして、しかももとの水にはあらず」と云り。たとへば、声は水、曲は流なるべし。しからば、絶えぬ声にて、曲を色色に流連して、音感重聞ならぬは、「絶えずして、しかももとの声にはあらぬ」なるべし。曲水をなし、石を立て、水簾・水錦の気色、庭前の面景ことごとく水体を作成せるは、是、曲付也。其、如此、声の水を、五音・四声の地体にて、流曲を作付するによつて、一音・一字の響きも、音律・四声の地体順道ならずば、流声断絶すべき事を心得べし。声をつかひ、音薬を用ゆる稽古は、是、水を清むる也。曲を正し、音律を習知するは、流体を作付する也。返返、「絶えずして、しかももとの水にはあらぬ」所を、声文の曲道に案合して、重聞ならぬ所を心得べし。